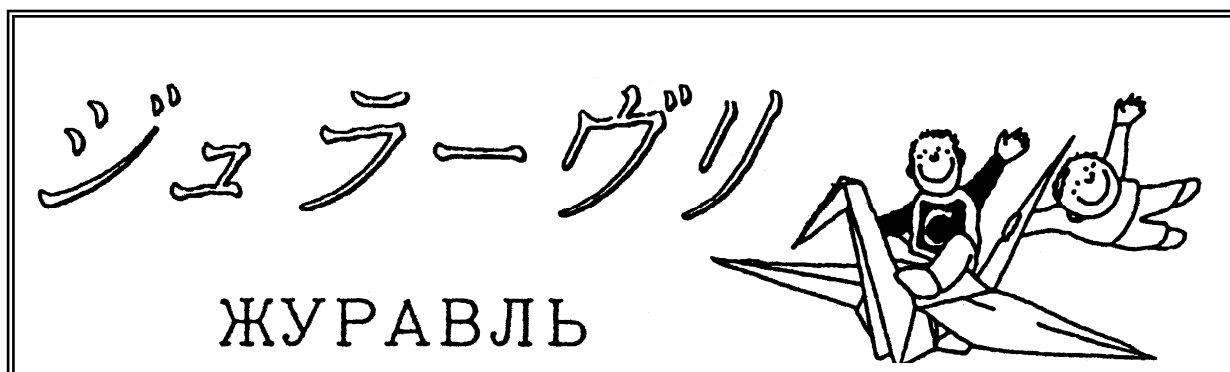




「チェルノブイリ 30 年・フクシマ 5 年国際シンポジウム」国際シンポジウム

心揺すぶられた原発核被害者の訴え！

被害者の補償と人権の確立を！

事故を繰り返してはならない！

フクシマを核時代の終わりの始まりに！

4月3日、大阪府教育会館で開催された「国際シンポジウム」は、盛況のうちに終わることができました。開催にあたっては、団体・個人併せて254件の賛同を頂きました。皆様のご支援・ご協力、本当にありがとうございました。

シンポジウムではチェルノブイリ・フクシマの事故被害者、被害者支援や反核・脱原発など様々な運動に取り組む人たちが、熱のこもった報告・意見表明、討論を行いました。会場には関西を中心に全国から約200名の参加者が集い、熱心に聞き入りました。

ベラルーシからのゲスト「移住者の会」代表ジャンナ・フィロメンカさんは、子供を抱えて5年間住み続けた高汚染地での苦労、移住を求めて住民が立ち上がったこと、事故後5年を経て移住したミンスクで「ゼロ」から出発した生活の苦労や健康問題のことなどを語られました。「私たちはフ



フクシマの被害者と同じく『平和の核』の被害者。全ての原発から脱却し、再生可能エネルギーを。核被害者の声を聴き、権利を守り、良い医療を」と訴えられました。

ロシアからのゲスト、パーベル・ブドビチェンコさんは、高濃度汚染地域にもかかわらず、経済的理由で移住できず 30 年間住み続けざるを得なかった現状と、その中で生きていく覚悟を決め、独居老人や障がい者、貧しい家庭など社会的弱者を援助するボランティア活動を若い人々と一緒に始めたこと、それが元になり、NGO を立ち上げ、30 年近く子どもの保養や甲状腺検診など様々な活動に取り組んでいることを語られました。そして「核被害者の権利を求め、被害を繰り返さないために、交流・情報交換など国際的活動と一緒に取り組もう」と訴えられました。

浪江町の馬場町長は、5 年経った今も家族がバラバラの生活を強いられ、塗炭の苦しみを味わっている現状をはなされました。そして原発事故による避難命令のため助かる命も助けられなかった悔み、事故と汚染の状況を知らせず町民を被ばくさせた東電と国の責任を厳しく批判し、町としての ADR（裁判外紛争解決手続き）集団申し立て、町民の健康管理、健康保持のための「放射線健康管理手帳」の発行、「どこに住んでいても浪江町民」の理念のもとに、風化と風評被害に抗して闘い、故郷の再生・復興に取り組んでいる思いを語られました。

「フクシマ原発労働者相談センター」事務局長の秋葉さんは多重雇用での、事故収束労働者の厳しい現状、白血病などの健康被害の増加への懸念、「一人ひとりの労働者の声を把握して社会に発信していきたい」との思いを語られました。

また広島・長崎・福井からの報告、各地での取り組みの紹介などがあり、最後にアピールを採択しました。ぎっしり詰まったプログラムであり、消化不良の感もありましたが、事故被害者の現状と、いったん事故が起きてしまえば取り返しがつかないこと、これ以上繰り返さないために、再稼働を止めさせ脱原発を進めようとの思いを参加者の皆さんとも共有できたと思います。今後も、チェルノブイリとフクシマの交流を深め、被害者の補償と人権の確立、脱原発に向け、皆さんとともに取り組みたいと思います。「国際シンポジウム」から、新たな一步を踏み出しましょう。シンポジウムの「報告集」を、是非お読みいただき、これからの活動に生かしていただけたらと思います。

（「報告集」をご希望の方は、「救援関西事務局」までご連絡下さい。）



～ジャンナさん語り歩く記～

チェルノブイリ事故被害者としての体験を訴えて －東京～福島～関西を訪問・交流－

チェルノブイリ事故 30 年の今年、ジャンナさんは「国際シンポジウム」実行委員会と原水禁の招聘で来日されました。3 月 25 日来日以降、4 月 3 日の「国際シンポジウム」の前日まで、東京・福島・関西を精力的に回り、チェルノブイリ事故被害者としての体験を語り、交流を重ねられました。そして、平和の核にすべてを奪われたこと、核は安全にコントロールできず使ってはならないこと、被害者の声を聞き、被害者の補償と人権が確立されなければならないことを訴えられました。

東京では・多くの人々にチェルノブイリ被害者として体験をアピール！

3 月 26 日・27 日：

＜原発のない未来へ！つながろう福島！守ろういのち！ 福島原発事故から 5 年 チェルノブイリ事故から 30 年 3.26 全国大集会＞

代々木公園には 3 万 5 0 0 0 人が集まりました。ジャンナさんは第 2 ステージで他のゲストと登壇。ぎっしり集まった人々の前で「世界中の原発で、重大事故が起こる可能性があります。原発を止めて、他のエネルギーを探すために、最大限の努力をしなければなりません。核の被害者の声を聞き、被害者に話す機会を与え、彼らの権利を守らなければなりません。被害者のことを忘れてはなりません。」と、力強く訴えら



れました。会場はシーンと静まり返り、ジャンナさんの話に熱心に聞き入っていました。集会後、3 コースに分かれてのデモも行われました。

翌日の「講演会 さよなら原発－世界から」（星陵会館）には 1 3 0 人が集まり、ジャンナさんも台湾の活動家とそれぞれに報告されました。海渡弁護士、振津さんの講演も行われました。その後、原子力資料情報室からのインタビューも受けました。

福島では・・同じ被害者として心から共感、深まった交流

3 月 2 8 日：

＜応急仮設住宅訪問＞

上野から、いわき市へ移動。楢葉町から避難されている佐藤さんのお母さんの住む応急仮設住宅を訪問。木造の家は黒ずみ、外見からも 5 年の歳月を感じさせられました。ジャ

ソナさんは、外まで出迎えてくれたお母さんのアキさんと会うなり、手を取り合い目に涙。同じ被害者としての思いが、言葉を交わさなくてもすぐに心が通じ合うものだと知りました。ちょうどお昼時にあたり、煮物、季節の野菜のおひたし、天ぷら、漬物など手作りのご馳走がいっぱい準備されていて、思いっきり堪能。ジャンナさんもお箸を器用に使って味わっていました。部屋の中には



アキさんの手作りのお人形、自分で描いた絵や書が、所狭しと飾ってありました。事故による放射能汚染のために故郷から引き離された仮設住宅での暮らしの中で、このような手作りの作品を作ることや、仮設住宅のご近所さんとも交流しながら、いろんな思いを紛らわして時間を過ごされておられるのだなと思われました。

<被災地見学>

そのあと、佐藤さんの運転で高さ 6.7m の建設中の防潮堤や除染廃棄物の詰まったフレコンバッグバッグの山を見ながら樫葉・大熊・双葉・浪江町へと6号線を北上し、浪江町請戸地区へ。浪江町は全町避難が続き、同地区は「避難指示解除準備区域」のために、そこに立ち入るには「許可証」が必要でした。（後日4月1日から「許可証」なしで立ち入りできるようになった。）同地区の放射能測定器は0.146mSv/時を示していました。数km先にある第一原発の事故による避難指示が出たために大津波の犠牲者の救助を中断せざるをえず、原発事故がなければ助かったかもしれない命も助けられなかった無念の場所です。花の飾られた慰霊碑の前でジャンナさんは何を語りかけていたのでしょうか。津波で壊れた家屋がそのまま残る町の中心部も案内してもらいました。



<古滝屋で交流>

夜はいわき市の湯本にある老舗旅館「古滝屋」に宿泊。オーナーの里見さんから、地震でライフラインが全てストップし真っ暗な混乱した中で接客したこと、その後の原発の爆発で一時避難したが1週間で帰ってきて、以後ボランティア活動を続けたこと、水が1か月も出ず、ガソリンなどの流通物資も郡山でストップしてしまい、普段当たり前前に使っている物がいかに貴重であるか感謝したこと、350年続いた老舗旅館の先祖の苦

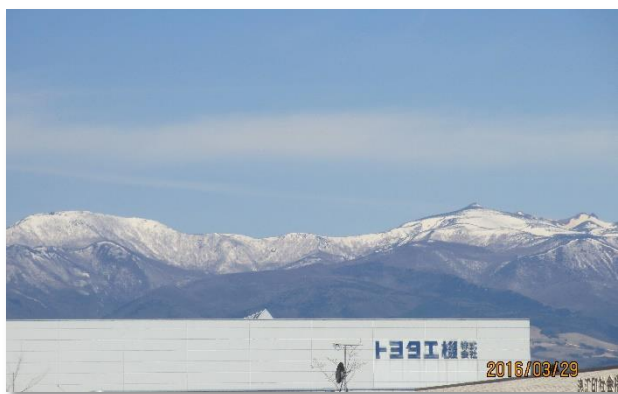


労を思い、2012 年夏に再オープンし、現在何とか営業を続けていることなどの苦労の連続だったお話を伺いました。さらに、いわき市民やいわき市に避難している方々と交流が続きしました。

3 月 29 日：

<浪江町二本松事務所で馬場町長を表敬訪問>

遠くに雪の安達太良山を望みながら磐越自動車道を一路二本松市へ。ジャンナさんは青空をバックに雪の冠の美しい安達太良山を写真にとりクエスト（そういえばベラルーシは平原の国で、こんな風景はなかったっけ）。二本松市にある浪江町の仮役場（浪江町二本松



事務所）に馬場町長を表敬訪問。ジャンナさんは「どんなに経っても故郷は忘れられない。良い思い出ばかり。フクシマの皆さんも健康不安を抱えて生活しているのではないかと思います。」と話されると、馬場町長は「健康問題に対しては、町独自に『健康手帳』を発行している。将来、万が一のことがあった場合の証明になる。生業も失い、元の生活に戻れないが、加害者である国と東電にきちんと責任をとってもらう。

賠償問題にも町として取り組んでいる。」など、お互いに共感しながらの話が続きしました。

<阿武隈茶屋にて>

福島市郊外にある「阿武隈茶屋」で、飯館村から避難されて「茶屋」を運営している渡邊とみ子さんと一緒に昼食。名物の阿武隈山系で採れた野菜を材料にしたお弁当を食べながら、同じように避難（ベラルーシでは移住）しなければならなかった者同士で意気投合。時にはこみ上げるものもありました。また、ジャンナさんも週末にはミンスク郊外のダーチャ（小さな農家を借りた「別荘」）で野菜栽培をしていることもあり、畑仕事の話で和気あいあい。品種改良には時間がかかり、とみ子さんたちは 30 年がかりでかぼちゃの種を品種改良し「いいたて雪っ娘」と名付けたこと、原発事故により大変な苦労をしたが、それでも必死で「種を繋い」できたこと、「種を繋ぐ」ことが重要なことなど話が盛り上がりしました。



り、畑仕事の話で和気あいあい。品種改良には時間がかかり、とみ子さんたちは 30 年がかりでかぼちゃの種を品種改良し「いいたて雪っ娘」と名付けたこと、原発事故により大変な苦労をしたが、それでも必死で「種を繋い」できたこと、「種を繋ぐ」ことが重要なことなど話が盛り上がりしました。

<飯館村一老人ホーム見学>

その後、除染の進む飯館村に行きました。黒のフレコンバッグやその上をまた緑のビニールで覆ったおびただしいフレコンバッグの山々！ショベルカーやプレハブの仮設の作業



飯館村：ショベルカーとフレコンバッグ

場員休憩所が目につきます。除染のために表土を剥いだ田畑も広がります

特別養護老人ホーム「いいたてホーム」を見学させていただきました。現在利用者は39人。職員は片道2時間かけて通勤している人もおり、特に冬場が大変なこと、避難指示が解除されれば東電の補償が打ち切りになり経営も

深刻な事態になるなどの説明を施設長から受けました。やっとフルオープンして職員も140人揃い、まさにこれからという時に原発事故が起こってしまったとのこと。本当に言うに言われぬ悔しさと怒りでいっぱいだろうと思われました。

その晩は福島市の県教育会館で交流・講演会「さようなら原発世界から」（「脱原発県民会議」主催）が開催されました。ジャンナさんも自分の体験を語り、「私は同じ『平和の核』による被害者として、フクシマの方々を心から理解することができます。自分たちの住んでいた場所を捨てることがどんなに辛いことか、自分の家族や友人の健康がどれだけ心配か、新しい場所で何から生活を始めてよいか分からない状況が理解できます。」と、フクシマの被害者への思いを話されました。

3月30日：

<郡山―「3a！郡山」訪問、帰阪>

郡山市に向かい、「3a！（安心・安全・アクション）郡山」の事務所でお母さん方と交流。事故から5年経ってもホットスポットが散在する郡山で、子どもたちの健康を案じながら暮らすお母さんたちの思いに触れ、ジャンナさんも同じく子どもたちの健康を心配してきた母親として、心の通じ合う思いをされたようでした。

その後、福島空港に行き、伊丹空港に降り立ったのは夜7時過ぎ。ネオンが瞬いていました。

福島訪問はジャンナさんにチェルノブイリ事故当時のことを思い出させると同時に同じ「平和の核」の被害者として、フクシマ事故の被害者の方々がどれだけ辛い思いをしているかと、心を重ね合わせた訪問でもあったようです。二つの事故被害者の交流が、直接に出会う中で、深まったと感じました。

（報告：猪又雅子）

福井では・・・

2001年に福井に来られたとき、ジャンナさんは「50基も原発のある日本で、つらく悲しいチェルノブイリのような事故が起きないことを祈ります」（中日新聞）と語っておられました。



15 年前は、敦賀半島の原発が見える越前海岸や和紙の里などに案内していますが、今回、久保きよ子さんと二人で武生駅に到着したのは夕刻でしたから、谷あいの最奥の集落にある我が家へ到着するまでの道中の日本の田舎の風景を眺めてもらうだけでした。でも、日本の里山は珍しかったのか、翌朝、彼女はさかんに山の写真を撮っていたものです。

夕食は、朝のうちに山で取ってきたワラビやアサツキ、野カンゾウ、ワサビなどの山菜と魚市場で仕入れてきた魚料理でもてなしました。刺身も大丈夫とは聞いていましたが、最後は食傷というよりいささか閉口気味だったようです。

ジャンナさんは、我が家の畑を見、自身の故郷を懐かしがっていました。ミンスクにも自分の畑があるそうで、帰国したらすぐに畑仕事にとりかからなければとも語っておられました。

翌日の午後は、振津先生と通訳の仕事を引き受けていただいた滋賀県の大津定美先生と武生駅前の会場で合流しての講演会です。午前中は、みんなで我が家の周辺の散策をしたあと会場に向かい、その途中にある「万葉の里」を見学。ここには日本のステンカ・ラージンたちの墓があります。

「万葉の里会館」に保存され、高校日本史の教科書にも出てくる「文字瓦」も見させていただきました。

「文字瓦」とは、信長の家臣・前田利家に虐殺された一向宗徒の生き残りの者たちが、民衆弾圧の不条理を後世に伝えようと瓦に刻み、敵将である前田利家の築いた砦の屋根に葺いたものです。500 年前の抵抗者たちが、後世の私たちに、ともに連帯してがんばろうと呼びかけてくれているのです。

とりとめもなく、4月2日のことを思い出して書きました。 山崎 隆敏



宝塚では・・・

押しずしのようにギッシリ詰め込んだジャンナさんの旅程の中、宝塚は2連泊で少しは余裕があったと言えるでしょうか。とはいえ、3月30日午後8時到着、31日午後には学習会、翌朝8時半出発で次の講演会へという厳しい時間割でしたが。



ともかく、31日の午前中は自由時間。“宝塚保養キャンプ”の子ども達が〈宝塚すみれ発電所第2号〉の見学に来るので、ジャンナさんも一緒に、みんなで出資して作った市民発電所を見ていただきました。子ども達は太陽パネルが並ぶ現場を見たあと部屋で説明・質疑の時間となりますが、ジャンナさんと通訳の松川さんとカメラマン役を引き受けてくれたBさんとで、お隣の清荒神へこの旅初めての観光

(！)に繰り出しました。お掃除が行き届いたきれいな境内をぐるりと巡って、田中が俄かガイドとなり「火の神様(火箸を奉納)が祀られています」などウロ覚えの説明をし、拝殿で頭を下げ、ジャンナさんはおみくじを引き、お孫さんのお土産には干支のストラップを選ばれました。約1時間、お天気に恵まれ気持ちのよい散策ができました。

お昼は〈宝塚すみれ発電所第2号〉のある大林寺の境内で円座になって、お花見弁当ならぬお花見サンドイッチ。「今年初めてのピクニック」と、ジャンナさんに喜んでいただきました。出発された頃のベラルーシはまだまだ冬が居座っていたでしょう。大林寺に前日下見に来た時は、まだまだ蕾ばかりだった桜が、朝から比べても2分咲きまで咲き進んだという感じで、ほころび始めた春を楽しみました。



午後は男女共同参画センターで「ベラルーシ“移住者の会”代表ジャンナさんをお迎えして～チェルノブイリ原発事故30年の思い～」と題したアフタヌーンティー学習会(恰好よく言い過ぎ！)。週日なので多数の参加は望めないかと心配だったけれど、30人以上が来てくださいました。滋賀県からの参加者もあり、ローカルグループとしてはびっくりぽん！(すでに古う～)でした。

宝塚ではチェルノブイリ原発事故について何度も学習会をしてきましたが、今回新しい参加者が多く、ジャンナさんが語られたチェルノブイリ被災の実態が印象深かったと思われます。振津さんの解説と“チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西”のあゆみも、簡潔でとてもわかりやすく、理解と共感が広がったことでしょう。ジャンナさんにはあちらこちらに移動して話していただき申し訳ないことでしたが、少人数で生の声を聴くというのはとても貴重な経験です。疲れも見せず頑張ってください、ホントにありがとうございました。通訳の松川さんもありがとう！

夕食は居酒屋で、ワイワイと和食をいただきました。焼酎のお湯割りを試したジャンナさんは「温かいお酒はちょっと・・・」と、顔をしかめていましたが、お料理はなんでも召し上がって、大いに盛り上がりました。宝塚の酒飲みも喜んでいました。

市民の思いが結実した〈宝塚すみれ発電所第2号〉を、次の講演地の奈良や福井でも話題にされたそうで、4月3日の国際シンポの折も、いい名前だとおっしゃり、「もっと再生可能エネルギーが普及するよう各国が努力すべきだ」と主張されました。その言葉に宝塚のメンバーは大きく頷いたものです。そのとお〜り。全部の原発止めて、再生可能エネルギーへ！

（原発の危険性を考える宝塚の会・NPO法人新エネルギーをすすめる宝塚の会 たなかでした）

奈良では・・・

チェルノブイリ 30 年・フクシマ 5 年の今年の取り組み

3月25日に来日して、東京、福島、宝塚と何か所もの講演をこなされてきたそうです。奈良での参加者には、この夏に保養プロジェクトを計画している人、神奈川から移住してきた人、和歌山県に住んでいるハワイ出身の人と、フクシマ事故によって行動が変わった方々が熱心にジャンナさんのお話を聞いていました。

東京のシンポジウムでは台湾の活動家の方とも一緒だったようで、奈良でのお話は、チェルノブイリから30年の年月を振り返って、そして福島の方たちへの思い、台湾の現状、宝塚で始まっている「すみれ発電所」見学の話まで、息つく暇もなく（通訳さんも大変）お話をされました。15年前に奈良にいらした時のことも覚えてくださっていました。パワフルに自身の役割をきちんと果たしていることが感じられ、笑顔で奈良での皆さんとの交流をされました。

（奈良脱原発ネットワーク 堀田美恵子）



奈良公園：桜満開の中で



チェルノブイリ事故後、事故処理のための作業員たちの食事を担当していたので「私も事故処理作業員（リクビダートル）です」とリクビダートルに与えられたメダルとヒバク手帳のお話をされた。

～パーベルさんの福島訪問～

“ロシアでもフクシマの現状を伝えたい”

“チェルノブイリとフクシマを結んで何ができるか
ともに考えましょう”

“次はノボジプロフで再会を…”

大阪での「国際シンポジウム」翌日の4月4日の朝、休む間もなく、パーベルさんは、福島の佐藤龍彦さん、通訳の松川直子さん、そして私（振津）と一緒に、伊丹から福島に飛びました。ロシアでの仕事（「ラディミチ」を引退してから、その手腕を評価され、今はモスクワで人権 NGO の「基金」の仕事をしています）も忙しく、来日も危ぶまれたパーベルさんですが、「この機会にぜひ、福島の被災現地を訪れ、実情を見てほしい。被災者の方々と直接に会って、チェルノブイリの汚染地での経験や思いを伝え、福島でのこれからの活動に何かアドバイスがあれば話して下さい。今後の交流にもつながっていくといい…」という私たちの願いを快く受け入れてくれました。

福島空港に着いて、佐藤さんの車に乗り込むや否や、パーベルさんの「福島取材」が始まりました。助手席に座って、運転中の佐藤さんに、楡葉町から避難した経過とその時の思い、その後、今まで続いている避難生活の苦悩、故郷のこと、家族のこと…根掘り葉掘りインタビューし、周囲の風景とあわせてスマホのビデオに数時間もの記録をしていました。二日間の福島滞在で、できる限り多くを見聞きたいというパーベルさんの意欲に、私たちも圧倒されました。（実は、パーベルさんは、スマホの使い方にまだ慣れておらず、一日目はビデオ記録の ON と OFF 全く反対に押ししていたそうで、記録したつもりの時間帯は全部 OFF になっていたとのこと！翌朝、「ポケットの中やズボンの裾し

か映ってなかった…」と、悔しがっているパーベルさんに、皆で大笑いしました。）

福島空港→いわき市→20km 圏内（楡葉、富岡、大熊、浪江、双葉）→避難者仮設住宅（いわき）→福島市（きらり健康生協、除染廃棄物仮置き場、屋内遊戯場、除染センター）→二本松（浪江町役場、真行寺、TEAM 二本松「市民放射能測定室」）→飯舘村（特別介護老人ホーム「いいいたてホーム」）と、駆け足で回り、6日の夕刻に羽田から帰国というハードスケジュールでした。

パーベルさんは、行く先々で熱心に人々の話に耳を



天神崎公園から楡葉町を展望。津波被害、除染廃棄物の山、5年経っても元の町には戻らない現状等…。佐藤さんから説明を受ける。

傾けていました。「ロシアでは、最近ほとんど福島の被災地の情報が伝わってこない。帰ったらノボジプロフの人々やマスコミにも、自分が見聞した福島の現状を伝えたい。」とのこと。「私たちも、チェルノブイリ事故直後には放射能汚染のことを知らされなかった。その後も経済的理由で移住もできず、放射能汚染との闘いは今も続いている。事故の5年後頃から、私たちの地域では、人々の健康悪化が目立つようになった。フクシマでも健診や子どもたちの保養、環境や食品のモニタリングを、



夜の公園は桜が満開（富岡町）

長期にわたってしっかり取り組んでいくべきだ。」とも、話していました。

ちょうど桜が満開で、新緑が芽吹き始めた自然豊かな福島に、パーベルさんはとても心引かれた様子でした。「私の故郷のノボジブコフも自然豊かなところ。私は庭仕事をしたり、自然の中で過ごすのが、ほんとうは大好きなんだ。チェルノブイリ事後で、自分の人生は変わってしまった…」とも話していました。

「ロシアに帰ったらチェルノブイリとフクシマ、そして世界の核被害者を結んで何ができるか…そんな共同プロジェクトのワーキンググループの具体的課題について、早速、考えたい。日本でも、フクシマでも、それぞれがアイデアを出し合って議論していこう。このことは、それぞれの『宿題』にしましょう。」と、パーベルさんは、元教師だけに(?) 私たちにもちゃんと「宿題」を出して帰られました。

福島でパーベルさんの訪問を受け入れて下さり、お忙しい中を案内して下さり、いろいろと話を聞かせて下さった皆さんに、この場を借りて心から御礼申し上げます。パーベルさんは、「ぜひ、フクシマの皆さんと一緒にノボジブコフに来て下さい。次はノボジブコフでお会いしましょう…」と言って帰られました。今後も交流を続けていければと思います。

(報告：振津かつみ)



「サンタさんが来た！」と、仲良くなった子どもたちと。

(二本松、真行寺)



医療生協の橋本さんの案内で福島市内を回りました。避難者仮設住宅のすぐ横に除染廃棄物の仮置き場とハローワークが並んでいる。(福島市)



除染廃棄物は、5年経っても、それぞれの家やビルの敷地内にグリーン・シートを被せて置いておくしかない現状。(福島市)



子どもたちの室内遊
戯場入口(左)。汚染
していない砂を入れた
屋内砂場がある
(右)。(福島市)



「きらり健康生協」の食品放射能測定室で測定
の説明を聞く(福島市)



たまたま開かれていた「きらり健康生協」組合員さんの会議で、飛び
入って挨拶をさせていただきました。



TEAM 日本松「市民放射能測定所」のホールボディカウ
ンターで、体内セシウムの測定をしていただきました。



飯館村の老人ホーム「いいいたてホーム」で三瓶所長から、事故
後のご苦勞、今後の運営についての悩みなどをお聞きました。

熊本地震の記録を原発の基準地震動の見直しに反映してください！ もし、M6. 5の直下地震が、川内原発をおそえば 原発はもちませんよ！

久保きよ子

2016年4月14日、熊本地震の前震が発生し、益城地区は震度7という激震がおそわれました。益城地区をはじめ、各地で観測が記録されました。新たな知見が半明しました。その記録を元と考えれば、川内原発の基準地震動を見直す必要性があることがわかりました。もし、熊本地震の前震であるM6. 5の大きさの地震が川内原発の近傍で起これば、1,000ガルを超える地震動が発生し、川内原発のクリフエッジ（安全機能の広範な喪失が同時に生じて、致命的な状態になるような状況）をも超える可能性が高いことがわかったのです。

そこで、私たち、若狭ネットは、緊急のお願い「原子力規制委員会に対して、熊本地震をうまえた川内原発の基準地震動に関する公開質問状」の賛同を全国に呼びかけました。4月26日から開始し、1か月足らずで、78団体、770個人の賛同を得ました（「救国闘争」も賛同）

交渉当日、原子力規制委員会からは、地震・津波安全対策担当調査官と、総務系長の2人が出席しました。

回答の中身は「今回の熊本地震から、ただちに川内原発の基準地震動を見直す必要性を感じない。ただちに見直す必要もないし、私どもは、再稼働の停止命令を出せる立場のみ、これから時間をかけて出てきた熊本地震の研究調査成果から、精査する必要があるれば、見直します。」という地震安全対策担当は思えない、無責任な回答でした。今も地震がおさまらないなか、住民の地震に対する不安や心配を無視する姿勢に憤りの声が集中しました。規制委員会の2人の姿勢から、「熊本地震から新たな知見を見つけよう、もし見つければ、すぐに基準地震動を見直そうとする姿勢」は全く感じられないものでした。

これまで、私たちは、M6. 5の地震で最大1340ガルの地震動が原発をおそうことを警告してきました。それは、原子力安全基盤機構JNESのは、震源断層モデルを使って、M6. 5の断

層による地震動解析によるものです。今回の熊本地震でも、地震動が震源断層に多数配置されていれば、はざとり波（原発の解放基盤表面での地震動）換算で1,000ガルを大きく超え、川内原発のクリフエッジ（1004ガル・1020ガル）をも超える地震動が観測された可能性が高いのです。

「M6. 5 最大震度7」が、川内原発の真下で起これば、原発は持ちません。

地表面に断層が表れない所でも、どこでもM6. 5の地震が起こると考えるべきです。M6. 5の地震を引き起こす震源断層を事前に発見するのは、今日の科学技術水準では事実上不可能であり、川内原発の直下このような震源断層が眠っていると考えて対策を考えるべきなのです。

私たちは「チェルノブイリ・フクシマを核時代の終わりの始まりに！」を合い言葉に原発再稼働の反対を訴えてきました。もっともっと多くの人たちに原発、放射線の危険を知らせ、仲間を増やしていかなばなりません。次の世代に負の遺産を少しでも少なくするのが私たちの役割です。強く強く怒りをかみしめ、かみしめ、参議院議員会館をあとししました。



川内原発の基準地震動は小さすぎるよ！
熊本県益城(ましき)観測点での地震観測記録を評価すれば、1000ガルを超えるよ！

チェルノブイリ事故30年、フクシマ5年、関電に申し入れをしました！

4月27日、関西電力に「チェルノブイリ30年、フクシマ5年」にあたり、原発再稼働反対、脱原発から再生可能エネルギーへの転換を求めて6団体・10人余りで申し入れを行いました。関電は「時間が取れない」「約束できない」との対応でしたが、とにかく当日に関電に行くと、結局総務部がいやいや対応してくれました。わずか5分、1階のスペースで申し入れ書を読み上げて渡すだけなのに、その間も、全身で早く終われという反応。いつものことながら、関電は全く誠意のかけらもない対応でした。関電が原発から再生可能エネルギーに転換して、こんな申し入れをしなくて済むような日が本当に早く来てほしいものです。(いのまた)

2016年4月27日

チェルノブイリ事故30周年に際しての 関西電力への申し入れ

関西電力株式会社社長 八木 誠 様

私たちは4月3日に「チェルノブイリ30年・フクシマ5年／国際シンポジウム」開催し、「チェルノブイリ・フクシマを繰り返すな」「事故被害者の補償と人権の確立に向けて」「フクシマを核時代の終わりの始まりに」の思いを強くし共有しました。チェルノブイリの被害者は同じ核被害者としてフクシマの被害者に心からの共感を寄せられました。そして「核はコントロールできない、核被害者の声に耳を傾けるべきであり、原発は止めなければならない」と訴えられました。チェルノブイリの高濃度の放射能汚染地から、人々は移住を余儀なくされ、事故から30年経った今も望郷の念はつづきます。故郷は放射能汚染が続き、豊かな自然の中で遊ぶことも、キノコ、ベリー、等の自然の恵みを受け取ることもできません。人々は健康に対する不安と恐れの中で今も、そしてこれからも生活を続けざるをえません。「チェルノブイリの黒い傷痕」は続いているのです。

フクシマ事故は未だに収束していません。汚染水、廃炉、放射性廃棄物等、難題は山積したままです。そのなかで汚染地での「復興加速化」「創生」「自立」が声高に唱えられ、帰還困難区域を除き、「20mSv／年」を基準に避難指示が次々と解除されています。仮設住宅の無償提供などの支援、精神的損害賠償なども避難解除の1年後には打ち切れようとしており、事実上帰還が強要されています。

熊本地震は甚大な被害をもたらし、今も活発な地震活動が続いています。M6.5の地震はいつでもどこでも起こり得るとされています。川内原発の直下でもその可能性は否定できず、その場合は炉心溶融事故の起こる危険性が指摘されています。若狭でも地震により原発重大事故が引き起こされることが心配されます。チェルノブイリとフクシマの二つの原発重大事故は、原発はひとたび重大な事故を起こせば、広範囲にわたる放射能汚染をもたらし、多くの人々に被ばくが強いられ、基本的人権が著しく侵害され、その被害は長期にわたり、取り返しのつかないこと、そして事故収束は困難を極めることを示しました。もうこれ以上重大事故を繰り返してはなりません。

貴社はあくまで原発の再稼働を目論んでいます。40 年を超して運転している高浜 1・2 号機の運転期間延長許可を申請し、原子力規制委員会は新規制基準に適合しているとする審査書を決定しました。また大津地裁の高浜 3 号機の運転中止、4 号機の再稼働中止の仮処分命令に対しても不服申し立てを行いました。現在、貴社の原発は全て止まっています。それでも今夏、他社に頼らずとも電力は十分に足りています。このまま全ての原発の再稼働を断念し、廃炉にしてください。遅きに失しないうちに、原発からクリーンな再生可能エネルギーに転換してください。

以下申し入れます。

- ・チェルノブイリ・フクシマを教訓とし、貴社の全ての原発をこのまま再稼働させずに廃炉にしてください。再生可能エネルギーに抜本的に転換して下さい。
- ・高浜原発 1・2 号機の 60 年運転期間延長を取りやめ、大津地裁判決を尊重し高浜 3・4 号機の不服申し立てを取り下げてください。
- ・美浜原発 3 号機を即刻廃炉にしてください。
- ・発送電分離と送配電網の公的な管理に率先して協力してください。



カンパ納入／お礼とお願い

「国際シンポジウム」が終わり、はや2か月が経とうとしています。皆さまのご協力・ご支援で無事に終わることができました。本当にありがとうございました。

また度重なるお願いで恐縮ですが、「救援関西」への会費納入とカンパへのご協力をよろしくお願いいたします。振込用紙を同封させていただきます。



夏も近づき、子どもたちの保養キャンプの準備も進みつつあるようです。今年も、チェルノブイリの子供たちの保養、フクシマの子供たちの保養を、ささやかではありますが支援したいと思います。また、チェルノブイリの被害者にも昨年並みの支援を届けたいと思います。是非、カンパのご協力をよろしくお願いいたします。また「救援関西」は皆様のご支援・ご協力のみで成り立っています。どうぞ、会費の納入もよろしくお願いいたします。

すでに納入いただいている方には、重複する失礼をどうかご容赦ください。

カンパ・会費の納入ありがとうございました！！

2016. 03. 24～2016. 05. 28



山崎知行 斉藤由佳 吉峰祥子 大泉尚子 戸張あかり 鈴木満喜子 伊藤勝義 畑章夫 泉迪子
丸本加寿代 小谷美智子 染木富美代 吉崎恵美子 川原重信 川辺比呂子 田中章子 村上玲子
(順不同・敬称略)

ニュース発行:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局

連絡先:〒591-8021 堺市北区新金岡町 1-3-15-102 猪又方

tel:072-253-4644

e-mail: cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp

郵便振替:00910-2-32752

口座名:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西